

日本における「郭璞」研究

関 清孝

はじめに

現在までに「郭璞」、または、その著作とされるものへの論考は少なくない。同時に、それらの論考の研究対象とするところも多方面に及んでいる。それは、『晋書』郭璞伝などで語られている「郭璞」が、主に次の三点によって構成されているためと考えられる。

- ①五行、天文などの術に優れた卜筮者であり、卜筮に関しては多くの逸話を持つ人物
- ②「中興の冠」と称され、『文選』に収められた「江賦」や「遊仙詩」など多くの詩賦誄頌を残した詩人
- ③博学で『爾雅』や『三蒼』・『方言』・『穆天子伝』・『山海経』・『楚辞』など多くの書物に注釈を残した学者

「郭璞」は、卜筮者・文学者・注釈家などといった多要素によつて構成されている。歴史書においては特に①の面が強調され、多くの逸話が収録されている。このような「郭璞」という人物や著作を研究対象とするのであるから、

論考は多岐にわたって当然であろう。ただ日本の研究においては、②の文学方面を対象としたものが盛んであるように思える。

筆者は、その中でも郭璞が撰したとされる『爾雅注』を研究の対象としている。『爾雅注』を撰したとされている、「郭璞」についてはない。しかし、書物は撰者なしには存在し得ないのも事実である。つまり、作者によって創られた書物を研究するためには、作者にも配慮する必要がある。

かかる理由から、本稿では、郭璞の注釈書を研究するための基礎的作業の一つとして、「郭璞」という人物、また、その「郭璞」の手によるとされている典籍に対して、近年の日本において、どのような研究がなされてきたのか、そして、いったいどのような研究が可能なのかを考えることを目的とする。⁽¹⁾ただし、以下でとりあげるのは、筆者の狭い視野の範囲内のことであり、また多くの研究の中での、ごく一部に過ぎないことを付言しておきたい。

(一) 「郭璞」研究

「郭璞」の研究は、古くは概説書の中で言及される程度であった。日本の中国古典研究においては、著作を読解することが、学問の中心であったことに由来すると考えられる。詩人としては、作品が詩集を編むほど残されておらず、また、思想面では注釈は現存するものの、思想史上主要とされる著作は存在しない。そのため著書を読解することが研究の中心であった中では研究対象とはなりにくい人物であったといえよう。

このような中で、狩野直喜『魏晋學術考』⁽²⁾が「三十七 東晋の文学(二) — 郭璞」において一章をさき郭璞に言及している。氏は郭璞が博覧の学者であったことと卜筮に長じていたことに触れ、その後、遊仙詩二篇を紹介する。

そして、郭璞の遊仙詩は「仙人になりきれぬものの詩である」とする。それは、不安定な政治状況下での「胸中の煩悶」があらわれたものであり、すなわち、郭璞の遊仙詩は「仙人を学ばんとして、能はざるものが、煩悶の詩と見るべきである」と結論づける。

*

狩野氏の著述は魏晋の学術を概説した中での一部分であった。その後、戦後になり学問の細分化がなされ、「郭璞」を対象とした研究も行われるようになった。次の論考がそれである。

林田慎之助「郭璞における詩人の運命―遊仙詩の思想構造」(『九州中国学報』第七号、一九五一年。のちに『中国中世文学批評史』(創文社、一九七九年)に「郭璞における詩人の運命」と改題し所収)

林田氏の論考は、小西昇氏の『中国中世文学批評史』に対する書評^③にて、「郭璞に関してはこの論文が戦後最初のものである」と評されるものである。

林田氏は、『晋書』本伝や『世説新語』・『資治通鑑』に見られる伝記資料と郭璞の詩文をもとに郭璞の人間像を考察し、また、郭璞の上疏文から政治へのかかわり方を考察している。詩や上疏文をたどると、「門閥豪紳が揺るぎなく築きあげた官僚機構」の中で、自身の「限界をにがいほど体験」し、そして郭璞は自身を官僚として引き立てた元帝が崩御の際に官を辞したとする。そのため、林田氏は「遊仙詩」の制作時期を政治への情熱が挫折したこの時期を外しては考えられないとしている。そして、このような背景をもとに詠まれた「遊仙詩」の中に「内部世界の自由の獲得」や「不自由と不条理からの解放」や「人間をやめる変形への欲求」など発見するのである。

すこし遅れて、官界において苦悩する「郭璞」の姿ではなく、「方術」・「卜筮」を中心とした人物像を述べたのが、篠田統「郭璞評伝」（藪内清編『中国中世科学技術史の研究』（角川書店、一九六三年。朋友書店、一九九八年再版）所収）である。その執筆動機を篠田氏は次のように記す。

わたくしは今までに二、三の方々はこの薄倖な学人の伝記を書いてほしいものとお頼みしたのだが、まだどなたにも御引き受けいただけがない。そこで、人物伝などは全くわたくしの畑ちがいなのだが、自分で書いてみることにした。

篠田氏の論考は、『晋書』郭璞伝の他、『資治通鑑』明帝紀・『世説新語』の他、稗史小説から、郭璞にまつわる逸話を抜き出し、項目別に列挙したものである。具体的には、はじめに『晋書』郭璞伝を要約し、郭璞の著作を卜筮類・詩賦類・表疏類・注釈類の四類に分類する。その後で、方術に関わる逸話五種、卜筮に関わる逸話八種を列挙する。そして、『神仙伝』・『搜神後記』・『洛陽伽藍記』に見られる、郭璞の死後に付け加えられた逸話を挙げ、郭璞説話進展の様相を述べる。最後に京房・管輅の術と郭璞との関係を史書から探り、「郭璞はこの京管の易学の最後の光芒であった」と結論づける。

*

篠田氏と同時期に、卜筮にまつわる逸話ではなく、詩賦などを多く残した点に注目し、文学活動の面から「郭璞」像を描く論考が示された。興膳宏「詩人としての郭璞」⁽⁴⁾である。

興膳氏は、はじめに史書に描かれた「郭璞」の姿を確認する。その史書における姿とは、詩人として、あるいは古

典の注釈家としての姿ではなく、「異能の才能、神秘的な技能を持った人―占筮者―」としての姿である。三国から東晋にかけての動乱の中で郭璞がどの様に生きたのか、そして最後に郭璞が刑死するまでを描く。

この論考は、後に『乱世を生きる詩人たち ―六朝詩人論』に収められる。その「あとがき」で、論の目的を次のように記している。

占筮者・古典學者・詩人と多彩な方面に能力を發揮した郭璞について、代表作である「江賦」や「遊仙詩」を中心に、彼の詩人としての側面に光をあてようと試みた。嵇康の提起した遊仙への志向を、一時代後の詩人について見きわめたいという意図が、郭璞という対象に目を向けさせる機縁なっていたはずである。詩人としての一面を、占筮者・古典學者という他の側面と交錯させたトータルな形で把握したいと心がけた。また官僚社会の中でマージナルな位置を余儀なくされた彼の心象を通して、貴族社会への批判を分析することをもう一つのねらいとした。

つまり、「嵇康の提起した遊仙への志向」を継承した「郭璞」という存在に注目をし、従来論じられていた面ばかりでなく、詩人としての面を含めて考察したものである。また、寒門出身であったために貴族社会の中では不遇であったことに対する思いが、文学作品の中に吐露されているという前提のもとに論じられている。このことは、心情が述べられている作品に光をあてて「郭璞」の姿を描こうとしたといえよう。

興膳氏の論考において、注目すべき箇所は他にも存在する。それは郭璞が生み出したとされる文学作品を詳細に分析をしているところにある。具体的には、「三 江賦」の章では『文選』所収の「江賦」を分析し、「四 遊仙詩―そ

の「一」から「六 遊仙詩―その三―」において、遊仙詩を分析する。遊仙詩は、『文選』に収められた七首ばかりでなく、丁福保『全漢三国晋南北朝詩』に輯められた十四首を対象としている。

「江賦」の章では、いわゆる文学批評書による郭璞の評価の確認や他の詠物の賦との比較を行う。そこで、オノマトペの頻用と怪異性の叙述という二点を中心に「江賦」の描写を考察する。

「遊仙詩」の章では、「四 遊仙詩―その一―」において、歴代の批評家の評価をまとめ、ついで郭璞以前の「遊仙詩」を通して、魏末から晋の時代においては、単なるイメージではなく、神仙界を実際に到達できる境地とする思潮が無視できない土壌であったことが述べられる。そして「五 遊仙詩―その二―」では、郭璞の遊仙思想は隱遁思想と結びついており、実現されうるべきものと考えられていたことが論じられる。しかし、「六 遊仙詩―その三―」では、その遊仙思想は、郭璞の行動という点において、つねに矛盾と挫折・絶望を伴っていたことが指摘される。

興膳氏の論考により「郭璞」の研究、いわば「詩人論」は一つのピークを迎える。また、同時に郭璞の詩文は文学研究の対象となるのに充分なものであることが示された。そのため、これ以降の研究は、興膳氏が論考の大半を割いて行った文学作品の分析が主流となる。つまり、詩人論から作品論へと移行するのである。

なお、『晋書』郭璞伝の訳注は、長谷川滋成「六朝文人伝―『晋書』郭璞伝―」（『中国中世文学研究』第十六号、一九八三年。のちに『東晋の詩文』（溪水社、二〇〇二年）に「郭璞の伝記」と改題し所収。その際に書き下し文を加えている。）興膳宏編『六朝詩人伝』（大修館書店、二〇〇〇年。「郭璞」の項は森賀一恵氏が担当）にておこなわれている。

(二) 文学作品研究

前章では、「郭璞」という人物に対する論考を見てきた。本章では郭璞が残したとされる詩文に対する研究を見ていく。詩文に対する研究は数多く存在する。必読の論文を落としていることを恐れるが、以下では、興膳氏によって示された、文学作品が如何によまれているのか分析する手法、そこから発展した研究に絞って見ていく。換言すれば文学作品研究の概観である。

興膳氏が「詩人としての郭璞」でおこなった作品分析を発展させたのが、佐竹保子氏の次の諸論考である。

- ① 「『文選』所収郭璞「遊仙詩」七首の構成」(『東北学院大学論集』一般教育八二号、一九八六年)
- ② 「遊仙詩の系譜―曹丕から郭璞まで」(『東北学院大学論集』一般教育八三・八四号、一九八六年)
- ③ 「疾走する逸民―郭璞「江賦」の叙法―」(『中国文学報』第五八冊、一九九九年)
- ④ 「見果てぬ夢―郭璞『山海経図賛』の叙法と認識―」(『東洋古典学研究』九号、二〇〇〇年)

以下では、そのいくつかの論旨を紹介したい。

①の「『文選』所収郭璞「遊仙詩」七首の構成」は、次のような考えに基づき論じられる。すなわち「遊仙詩」七首は連結しあい、さらに其七から其一に循環する構成であるとする。そして、興膳氏が調査をした郭璞以前の「遊仙詩」分類を利用し、郭璞「遊仙詩」七首中の六首が新たなモチーフをもち、一首が前代から踏襲されてきた仙界の幻想的描写というモチーフであるとする。氏によれば、新たなモチーフとは「仙化の前提としての隠逸の称揚」、「仙化

を遂げ得ぬ不安と絶望」、「俗界への拒絶と否定」である。そして、その特異性を生かし、さらに、踏襲性をも活性化させるのは、七首の選択と構成の妙であったとしている。ここでの踏襲に関しては、「遊仙詩の系譜―曹丕から郭璞まで」によって詳細に論じ、「遊仙詩」の集大成と位置づける。

③の「疾走する逸民―郭璞『江賦』の叙法―」は、「江賦」には、『山海経』などに見られる奇怪な生物の列举、動植物の叙述に用いられる清新な情景描写、さらに新しい仙境の描写が見られるとする。そして、これまでの江海賦には見られなかった、中心から周縁の逸民の世界へと移動する人々を描いている叙述を指摘する。そこに素材の発見と表現の開拓を見る。

これら佐竹氏の論考は②を除き『西晋文学論―玄学の影と形似の曙』^⑤に収められた。なお、書籍化するにあたっては、④↓③↓①と配列し、④と③との間に「郭璞『山海経凶賛』と『莊子』及び『莊子注』』という新たな論考を加えている。

新たに加えられた「郭璞『山海経凶賛』と『莊子』及び『莊子注』』では、郭璞「山海経凶賛」と『莊子』ならびに郭象『莊子注』との比較をおこなっている。そして、その比較から『山海経凶賛』が郭象『莊子注』から思想的影響を受けていること。そして、同時に「凶賛」の、『莊子』の「斉物」や『莊子注』の「自性」の思想に近い認識が、一般には「異形」とされている物たちへの注視を導き出し、『凶賛』の書き手に、新たな素材の発見と表現の開拓をもたらしたと推測される」とする。つまり、『莊子注』の影響は前掲書のサブタイトルになっている「玄学の影」にあたり、「異形」への注視・表現に「形似の曙」を認めているのである。

従来の「郭璞」研究では、論証に『晋書』本伝をはじめとする郭璞の伝記資料を決まり事のように用いていた。荒唐無稽ともいえる数多くの逸話が、後世に語られる「郭璞」の特色でもあったからである。これに対して、佐竹氏は

作品の叙法からその作品の個性を導き出そうと努めている。「遊仙詩」や「江賦」といった文学作品と作者「郭璞」とを安易に結びつけることなく、関係作品との比較によって論を立てるのである。そのことは、著作意図を論じる際に「郭璞」という作者名を使用することはさき、「書き手」という表現を使用していることからもうかがえる。つまり、作者の個性ではなく作品の個性を究明することに主眼をおいた研究といえよう。

*

興膳氏と佐竹氏の研究を基礎として、近年において体系的に研究を進めたものに、大平幸代氏の次の論考があげられる。

「郭璞」説話の形成」（『中国文学報』第五九冊、一九九九年）

「郭璞」「遊仙詩」の孤立」（『東方学』百一輯、二〇〇一年）

「靈妙なる長江——郭璞「江賦」の表現と世界認識」（『日本中国学会報』第五五集、二〇〇二年）

以下において、これらの諸論考について、その論点を要約することにする。

「郭璞」説話の形成」は、『晋書』郭璞伝などに見られる説話で語られる郭璞像がどのように形成されたのかを考察したものである。その説話は、時代の推移とともに徐々に蓄積されたものであるとし、郭璞像の形成過程を二つの段階に分けて論じている。一つ目は、王導らが東晋中興の正当性を主張するために郭璞の卜筮を利用し、郭璞に卜筮者として高い評価をあたえた段階である。このときに郭璞は京房や管輅に勝るとも劣らない卜筮者であると思なされるようになったとする。二つ目は、王敦の乱の際に刑死した郭璞が、犠牲者の代表として悲劇的に語られるようになった

た段階である。このとき郭璞は王敦に殺されたのではなく、仙化したのだという伝説を生んだとする。この二つの段階を経て、郭璞には生死をも超越する術士の像が加わり、「郭璞」の説話が生み出されるようになった、としている。

次に「郭璞「遊仙詩」の孤立」では、次の事象に対する疑問を解決することを目的としている。それは、郭璞の「遊仙詩」は佐竹保子氏が「遊仙詩の集大成」と指摘したような作品である。また、仙化できない自己の感慨を記録するという点において、従来の「遊仙詩」を超えるものであるが、この感情を漂白する叙述方法は後世に継承されていない。この集大成でありながら継承されないという、相反する事象である。この事実を大平氏は「孤立」と表現し、そこに作品の独自性を見いだしている。その独自性とは次の二点である。一つめは、郭璞の「遊仙詩」は寒門出身であり、同時に卜者であるがゆえに当時の名士集団に入れなかった郭璞、つまり、当時の文壇において「孤立」していた郭璞が仙境を探求し、その神聖さと登仙の困難さを悟った末に生まれた、ということ。二つめは、このような遊仙できない「遊仙詩」は、当時の文人たちには超越しているがゆえに、受け入れられなかったということである。そして、この二点を「孤立」というキーワードで結びつけ「郭璞の詠懐詩的遊仙詩の孤立は卜者郭璞という人物の孤立の表れでもあったのである」と結ぶ。

「江賦」の漢賦から発展した様相や奇怪な動植物や長江の流れの様子を難解な字をもって描写している手法は、すでに興膳宏「詩人としての郭璞」と佐竹保子「疾走する逸民―郭璞「江賦」の叙法」によって指摘されている。「靈妙なる長江―郭璞「江賦」の表現と世界認識―」は、これら先行研究を発展させたものである。大平氏は、この「江賦」と東晋中興との関係に注目し、「江賦」が神域にもつながる境界として描かれていることを指摘する。靈氣の動脈としての「江」は、その流域を神靈によって守られた空間とし、その靈性によって東晋中興を保証する。ここから「江賦」は江海を主題とした詠物賦でありながら、実質的には王都賦に相当する意味を持つのである。また、

「江賦」の世界観は『山海経』にもつながるものであるが、「江水の靈氣を可能なかぎり文字によつて具象化し、そこからたち現れる「妙」を表現しようとする試み」が「江賦」であつたと結論づける。

「遊仙詩」や「江賦」に対しては、それまでに高い成果があげられてきた。大平氏は前掲の二つの論考で明記しているように、興膳氏や佐竹氏の成果を前提として論を進める。そして、そこにさらなる深みを論じるため、「郭璞」説話の形成」で論じられた「郭璞像」や作品が作り出された当時の時代背景が用いられる。大平氏が用いた時代背景とは、「郭璞「遊仙詩」の孤立」では、郭璞が入ることができなかった名士集団であつたり、「靈妙なる長江——郭璞「江賦」の表現と世界認識——」においては、東晋中興を肯定し支えた文壇である。すなわち、文学などの学術的行為を生みだし、それらを成立させている文化環境とすることができよう。このように大平氏の論考では、郭璞という詩人が生きた環境、つまり時代背景を用いることによつて先行研究を發展させ、また、当時の文壇における郭璞の姿を説話に求め、そこから「郭璞」ではなく「郭璞像」という新たな視点を提示したという、二つのことがなされたのである。

(三) 文学作品研究における方法の変化

ここまで、「郭璞」研究、ならびに郭璞が残したとされている文学作品への研究の様相を見てきた。これらをまとめる前に一般的な研究方法の視点について述べておこう。

中国古典学のほとんどが文献を研究対象としている。つまり、言語表現の理解である以上、理解ないし研究は、言語的認識という側面を有することは否定できないであろう。一方、文献は人が生み出すものである。人間が作り出し

たものを探求するのであれば、その産出「意図」を理解することも重要な命題であろう。そのため、作品の研究において、この「言語的側面」と「心理的側面」のどちらに重点を置くかで、研究方法の特質が大きく異なることになる。文献研究が持つ「言語」と「心理」の二つの面は、極言すれば「作品」と「作者」と言い換えることもできるであろう。そこで、このような二つの側面から見ると、研究方法はどのような特徴を持つことになるのだろうか。

まず、言語作品としてのテキスト内部構造をあくまで言語レベルで説明しようとする手法がある。その際に関連テキストの言語表現を用い相対化する場合もあり、客観的な手法ともいえる。次に作品を、それが成立した時代の事実関係から説明しようとする手法が考えられる。作品を、それにまつわる客観的事実関係の中に置き読みとる。事実関係とは、そのテキストが描き出す現実との関わりの場合もあれば、その作品が成立した時期の歴史的背景の場合もある。そもそも、どの言語テキストも、ある歴史的コンテキストから生まれたものであるから、テキストのメッセージを読み解くには、その時代背景に関する認識が不可欠である。

以上の二つの方法は、「言語テキスト」そのものに向けられた手法であるが、今度はテキストを生み出した作者自体に重点を置いた研究が考えられる。ただ、作者そのものといっても、二つの手法が考えられる。一つ目はある作品の解釈を通じて、その作者の個性や独自性を記述する方法。そして、作者の心理そのものの微細なプロセスにまで立ち入る方法、つまり作者が作品をどのように創作したのかということの分析をする方法が考えられる。以上の四つの手法を改めてまとめると次のようになる。

I 作品そのものを対象にした方法

① 作品の内在的解釈

② 作品をその事実関係との関連から研究する方法

II 作者を対象にした方法

③ 作者の個性を求める方法

④ 作者が作品を生み出した背景を探求する方法

どの場合においても、作品ないし作者の個性・独自性を解明することが大きな役割であることは言うまでもないであろう。

さて、この四つの方法を前章までに見てきた「郭璞」研究に当てはめれば、先行研究への回顧として以下のことが指摘できるであろう。はじめは、林田氏や篠田氏の伝記資料から人物を記述する方法(④)から研究が始まった。その後、郭璞の詩文を通して、郭璞の個性を描き出し(③)、同時に作品への分析をおこなった興膳氏によって、「遊仙詩」七首に循環性を求めるような佐竹氏の方法(①)への道が開かれた。そして、文学を生み出す環境・文学を成立させている場と強く意識する大平氏による②の方法へと転換したと言えよう。

端的にいえば、「郭璞」ならびに彼の著作とされる作品への研究は、郭璞個人、つまり、作者から研究が進められた。そして、作品への研究へと移行したといえる。

付言するならば、このように文学研究が変化したこと背景として、文学研究をする人々が研究方法に自覚的であったことが考えられる。たとえば、郭璞と同じ六朝時代の陶淵明への研究方法について、川合康三氏は『中国の自伝文学』⁽⁶⁾の中で、次のように述べる。

文学としての問題は、陶淵明という人間が実際にどうであったか、ではなく、陶淵明がどんな文学世界を創り出したか、なのだ。陶淵明の「実像」なるものを描き出して、それを文学研究であると錯覚している例もないではないが、文学とは人間の可能性の追求であるべきであり、可能性を繰り広げ、それを人々に呼びかけ、共感を呼び起こすものではないだろうか。

これは以前に行われた、陶淵明の文学から陶淵明の実像を追及しようとした研究への批判である。このような人物研究への批判は川合氏に限られたものではない。そして、結果として郭璞の文学作品へと目を向ける要因になったと考えられる。

ここまで文学方面に対する研究を見てきた。文学面での研究においては、その方法論について、発展・変化を求め、多くの成果があげられていた。しかし、「郭璞」を構成する要素は、はじめに確認したように文学作品を残したことだけではない。後世、史伝などで語られた「郭璞」の姿は、むしろ卜筮の術に長けていたことや、多くの典籍に注を施したことである。幸いにも、卜筮の術に関しては、牧尾良海「風水思想小考―郭璞とその前後」⁽²⁾や宮崎順子「伝郭璞『葬書』の成立と変容」⁽³⁾などの成果があげられている。そのため、次章では、郭璞が残した注釈に対する主な研究を見ていきたい。

(四) 注釈研究

注釈研究は主に思想史上重要（と考えられていた）人物の研究の中で行われてきた。それは主に近世の人物であり、

たとえば朱熹を研究するために、『四書集注』などがその一環として読まれていたようなことである。その後、注釈が研究対象として可能であること、またその重要性が説かれるようになる。その代表が、加賀栄治『中国古典解釈史—魏晋篇—』⁽⁹⁾である。加賀氏は右掲書の序論において、経書の注釈研究の重要性と必要性を強調する。さらに、吉川忠夫「顔師古の『漢書』注」⁽¹⁰⁾などが経書以外の書物に対する注釈においても成果を挙げた。こうして注釈研究の下地は整えられ、この後数多くの古典籍の注釈が研究されていく。

なお、郭璞の注釈研究においては、もう一つの流れが存在する。それは坂井健一氏の音注研究である。坂井氏は、『經典釈文』に収められる音注の音韻を研究する中で、「經典釈文所引音義攷(7) — 郭璞・爾雅音義について」⁽¹¹⁾を著した。『經典釈文』所収の音注を注釈家別に論じたもので、計十一本にものぼる論考の一つである。

このような注釈研究の展開の中で、郭璞の注釈研究において、最も多くの成果を上げているのが立石広男氏である。氏の郭璞に関する研究を時代順に以下に示す。

「郭璞の音注について(上) — 『方言』における反切上字」(『日本大学 漢学研究』八号、一九七二年)

「郭璞の音注について(中) — 『方言』における反切下字」(『日本大学 漢学研究』九号、一九七二年)

「郭璞の『爾雅』音について」(『日本大学人文科学研究紀要』十七号、一九七五年)

「郭璞の音注について(下) — 『方言』における直音注を中心に」(『日本大学 漢学研究』十三・十四合併 号、一九七五年)

「『爾雅』注における方言」(『日本大学人文科学研究紀要』三三号、一九八七年)

「『爾雅』注に関する考証の問題」(『日本大学人文科学研究紀要』三十五号、一九八八年)

「郭璞の言語意識」（『沼尻博士退休記念中国学論集』汲古書院、一九九〇年）

「郭璞の音注について」（『日本大学人文科学研究研究所研究紀要』四七号、一九九四年）

「郭璞の訓詁」（『栗原圭介博士頌壽記念東洋学論集』汲古書院、一九九五年）

「郭璞の音注について（2）」（『日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要』五七号、一九九九年）

「郭璞の音注について（3）」——『山海経』全音注資料』『日本大学文理学部人文科学研究研究所 研究紀要』六三号、

二〇〇二年

「占筮者郭璞——占筮者尚其占」（『宮沢正順博士古希記念東洋——比較文化論集』青史出版、二〇〇四年）

これらの論考で立石氏は、郭璞の注を実証的に検証していく方法と、郭璞の人間像から注釈の著作意図や郭璞の思想を求める方法をもちいる。一つ目の方法では、坂井健一氏の方法を発展させたものである。坂井氏は『經典釈文』の音韻を研究するために、そこに引用された郭璞の音注も対象としていたが、立石氏は郭璞の著作の中に見られる音注を対象としたのである。『爾雅注』を初めとして、『方言注』や『山海経注』の音注を主な対象とし、音韻学的に成果を挙げている。たとえば、「郭璞の音注について（下）」——『方言』における直音注を中心に——では、『方言注』の音注は後人によって手が加えられていることをふまえた上で、「郭璞の音韻傾向は、直音注において諧声符に基づく上古音の要素を色濃く伝えて」いる、というような興味深い指摘もなされている。また、『爾雅』注に関する考証の問題では、『爾雅注』内の「今」・「今之」・「今人」という形式をとる注の数を表にまとめており、郭璞注の注釈用法を考える上での大きな材料となり得る。

もう一つの方法では、「郭璞」そのものを対象とし、郭璞の著作意図や思想を考察している。たとえば、「郭璞の言

「語意識」は、『晋書』郭璞伝の「言論に訥なれども、詞賦は中興の冠為り」という記述に基づいて論を展開し、「口吃であつたために、言語を深い洞察力によつてとらえることが出来た」とする。また、「郭璞の訓詁」は、「郭璞にとつて許慎等の生きた漢代がどんな意味を持つのか、その訓詁注釈の面から考えてみる」ものである。そして、郭璞が司馬相如の「子虚賦」・「上林賦」や楊雄の『方言』に注し、『爾雅注』の中で『説文解字』を引用していないことなどから、西漢こそが郭璞の「古」の基準である、とするのである。このように注釈を出発点として、作者である「郭璞」の思想を見ようとし、また歴史書に見られる郭璞に対する記述を著作に当てはめ注釈を見ようとするものである。このような作者と作品とをストレートに結びつける方法の問題点については、次章で詳しく考えたい。

郭璞の注釈の中で、完全な形で現在するのは『爾雅注』・『方言注』・『山海経注』である。『爾雅注』・『方言注』については、立石氏の論考に依り、そのおおよそを見た。以下では、『山海経注』に対する研究を見たい。『山海経』研究の一環として、郭璞『山海経注』にまで言及したものが次の論考である。

松田稔 「『山海経』郭璞注引書考」(『国学院短期大学紀要』十一卷、一九九三年)

松田稔氏は『『山海経』の基礎的研究』^①や『『山海経』の比較的研究』^②を刊行するなど、長年『山海経』を対象としてきた研究者である。その膨大な研究の中で、この論考は『山海経』の受容の様相を考察したものである。その目的を松田氏は次のように記す。

現存する注釈の中で……中略……時代的にも『山海経』成立時期により近く、基礎となる郭璞の注釈を考察することによって、郭璞当時どのような事項が注釈を必要としたのかを知り得ると考える。そこで注釈内容を探る手懸かりとして、他書を引用して証拠づけているものを利用することとし、他の書物との関連をも含めて考察していく目的をもって、本稿を引書考とした。

論考は、まず「郭璞注引書一覧表」により、各篇における引用書の全数を示す。次に本文の何に注が施されたのかを「事項一覧表」で示す。「事項一覧表」は「引用書を用いた注釈」と「郭璞自身の語による注釈」とを分けており、郭璞の注釈を研究する者にとって益するところが大きい。また、「内容全てで引用書による注の方が割合が多く、他書を引用して根拠を求める必要を感じたものと見える」や「郭璞自身のことばによる注で最も多いのが字音の注で」次に多いのが文字の異同であることなど、興味深い指摘もある。

かくして、『山海経』本文と郭璞注の引用内容とを比較検討し、郭璞の注の態度をまとめる。すなわち、司馬遷『史記』の大宛伝で「荒唐無稽を言うものとしての烙印を押されたものを、一つ一つの記述において消し和らげていく」ものであり、そして、「古代の伝承を留めた貴重な記録であるという意識が、注のつけ方の中に読みとれる」と結論づける。

(五) 注釈研究における問題

前章では、郭璞が残したとされる注釈への主な研究を見てきたが、文学作品の研究に比べ、少ないと言わざるを得

ない。郭璞の著作を対象とするという点でいえば、今日までの郭璞の注釈研究の成果は、立石氏の諸論考に過ぎない。それでは、これから郭璞の注釈研究をしていく上での問題点はどこにあるのであろうか。

たしかに、中国古典学は人文科学に属しているのであるから、作者の思想体系を求めるとは大きな命題である。⁽¹⁴⁾しかし、目標とする先が作者の心理プロセスであるとなると、そもそも達成しえない課題を背負うことになる。

つまり、他者の心理内容の解明とは、そもそも一人称的にしか接近しえない領域に他者がアプローチすることである。これでは明確な把握に到達することなどありえない。同時にテキストの表現・構造などの分析を作者の心理内容の把握と考えるのであれば、その妥当性は客観性を持ちえない。

そうであれば、作者の研究とは成立しえないものなのであろうか。テキストには一貫性があり、それはそれを統合する人物の「意図」の表明であるということにより支えられている。そして、一貫した意図をもっていると想定されるときに、そのテキストの統一的理解が成立するのである。そこにはそのテキストを読んだ過去の解釈者が、想定した「作者」の姿が存在する。

『晋書』郭璞伝などに記載されている「郭璞」の姿は、後世の他者が描いた郭璞像である。そうであれば、まずやらねばならないことは、伝記資料を集めることではなく、著作物の読解である。しかも、著作中の記述を歴史に照らし合わせて切り張りすることではなく、その中に見られる統一的意思を探り出すことである。もし、郭璞の思想を求めらば共通項である「郭璞」という人物の思想を導き出すべきであらう。

*

さて、今日のわれわれの前には「郭璞」が撰したとされる典籍が存在するだけである。郭璞撰の作品抜きには「郭

璞」研究は成り立たないのである。とすれば、今後の研究においては、この「郭璞撰」とされる作品の厳密な解釈に基づいた研究が求められることは言うまでもないが、以下では、この作品の解釈について言及したい。

そもそも中国古典学は文献上に成立している学問である。そのため、その研究方法は文献学を出発点とし、その文献をいかに読むかであり、作者の思想を想像することではない。その際に、より深い読みをするために方法論をどうすべきかという問題が存在するのである。郭璞の『爾雅注』を例にとるなら、『爾雅注』という古典籍が研究対象となるのであって、『爾雅注』という典籍からストレートに撰者の思想を求めるものではない。つまり『爾雅注』思想研究、あるいは『爾雅注』を重んじた中国知識人層の思想研究でなければならない。

『爾雅注』が対象ではないが、たとえば桜井龍彦「郭璞『山海経』注の態度(下)」⁽¹⁶⁾は、『山海経』の郭璞注に見られる「広異聞(異聞を広むる)」という表現を、「郭璞の注釈者としての態度、姿勢に関わる問題として、捉えることができる」として、郭璞注の引書などの方法を考察する。そして郭璞は「異聞を広めようとした」ため『山海経』に注し、「そして異聞を広めた結果、達識博学になり、世の怪・異・奇といわれるものに困惑することのない通儒に、自己を高めること」ができたとし、この「広異聞」という表現に帰結させる。このように注釈での表現「広異聞」を郭璞の意思表示という前提のもとで、その議論を展開しているのである。これは『山海経注』という、一度典籍として具体化されたものから、郭璞という一個人の思想を導き出そうとする行為である。これがあるまじき姿であることは先に述べたとおりである。

かかることを踏まえれば、我々がまず行うことは、原典である『爾雅注』などの注釈書に回帰することである。その上で、対象を『爾雅注』にしぼった場合に参照すべきは清朝考証学の成果であり、また、長沢規矩也氏が行った郭璞注本各本の文字比較などの実証的成果である。⁽¹⁶⁾出土資料のような新資料が出現する可能性は極めて低い典籍であ

るので、先の成果を十分に参照し、厳密に解釈しなおすことによって、その思想的特質とその特質を構築している文章構造を明らかにすることが求められる。つまり、厳密な解釈の上に、注釈の論理構造を再構成し、かつ論理的特質や整合性を明らかにすることである。

さらに注釈という点に注目するのであれば、注釈史上において、その注釈がどのような位置にあり、いかなる評価を得てきたのかを明らかにすることである。そして、このような諸点を明らかにすることから、郭璞『爾雅注』が中国の学術史上における役割が考察できるのである。

*

郭璞から生み出された詩賦などを対象とする場合には、作者と作品との関係において研究をするのであるから、文学作品研究で見られた研究方法は有用性をもつ。しかし、郭璞の注釈を対象とする場合はさらに次のような要素が加わる。それは、被注釈書と注釈者が異なる時代で生み出されたということである。歴史的なへだたりがあり、注釈者が過去に生み出された書物に対して、どのような認識をもっていたのかという問題である。そこには、おのずと歴史的な視点、つまり「思想史」という視点が必要になる。

「思想史」を視野に入れる場合の問題点については、土田健次郎氏の「近世儒学研究の方法的問題」^①で詳しく論じられている。土田氏は、思想そのものの実態と、それが思想史として記憶される時の乖離を述べ、そのなかで士大夫は、経学や儒学を軸にした思想史の中に「身を置くことで時代を超えた思想文化の場に参入できた」ことを指摘する。この何層もの領域が士大夫の思想文化の中にあるため、それを研究するには、次のようなことが必要であると述べる。

そこで必要なのは、まず個々の思想が出現する状況の具体的把握を通してその実態を検証すること、次に先に述

べたような生の思想的要請が文化的に潤色されていく過程の把握、そして今度は…その思想が後に思想史として記憶されていく姿の追跡、という三段階の存在を認識することである。

また、同時に「どのような思想であつても、時代性を背負って登場してくる」ことを指摘し、その関連から、「従来の思想研究は発信者側の研究が中心であつたが、今後は受信者側の研究も要求されよう」と読者論の必要性も説く。そして、次のごとくまとめる。

近代儒学の個々の思想の分析には、前提となつている共有価値を掘り起こして共通主観の実態を炙り出し、そこに成立する客観と主観とりまぜた了解の構造を説明し、さらに思想の発信者と受信者の相互了解の前提を認ずるといったことが必要なことが知られる。そして思想家が前提とせざるをえない共通価値や、発信者と受信者を橋渡しする契機は、士大夫文化を成立させているものであつた。

以上は「近代儒学」を研究する際の言説であるが、それぞれの単語を置きかえるれば、ここまで考えてきた郭璞の注釈における問題になるであろう。

ここまでをまとめれば、今日の「郭璞」の研究において考えねばならないことは以下の通りである。まず、先に確認したように、注釈などにおける表現からストレートに郭璞の思想を求めることはできないこと。また、残された作品を研究対象にするのであるから、それを厳密に解釈しなければならないこと。そして、特に注釈に対してはその作品内の言説が発せられた状況も配慮しなければならないこと。その状況とは、単に東晋の一時代のものではなく、「郭

璞」までに積み上げられてきた知識人層に共有されるもの、そして「郭璞」の作品が受容されていく様子でもある、ということである。

おわりに

以上、戦後の日本における「郭璞」研究の流れを追ってきた。文学面での研究においては、その方法論について、発展・変化を求め、多くの成果があげられていた。しかし、「郭璞」を構成する要素は、今日言う所の文学作品を残したことだけではない。後世に語られるのは、むしろ卜筮の術に長けていたことや、多くの典籍に注を施したことである。しかし、注釈研究においては、主観が中心とした考察がなされてきた。このような点からいえば、「郭璞の注釈」への研究は、研究者の個人の問題意識に基づき行われ、方法論において無自覚であったと言える。

そして、方法論を探るために、「作者」研究の限界、文献上における厳密な解釈の必要性、思想史という視点の必要性と留意点を考えてきた。¹⁸ これらを確認したところで、筆者の態度を明らかにし、小論を結びたい。

本稿の最初に述べたように、筆者は郭璞『爾雅注』を研究対象としている。その方法については、まだ完全に確立されているとはいえない。土田氏が指摘するように、個々の思想の分析には、その前提となっている多くのものへの確認作業が必要である。その一つとして筆者が考え、実践しているのは、『爾雅注』の読解を通して、文献において展開された郭璞『爾雅注』への評価を再考察をし、もう一度『爾雅注』の思想体系を浮かび上がらせることである。そして、それは、「郭璞」の学術を理解する手懸かりとなり、さらには、古典世界で郭璞『爾雅注』を存在させていた共有価値を探ることでもある。また同時に、中国の知識人たちが、郭璞の注が附せられた『爾雅』をどのように利

用してきたのか、郭璞という人物をどのように理解してきたのか、という受容の面を考察することでもある。このことを今後の目的として、稿を結びたい。

注

- (1) 本稿を作成するにあたって確認した文献については、すでに目録にまとめてある。これは別稿にて公表する予定である。
- (2) 筑摩書房、一九六八年。
- (3) 『九州大学中国文学論集』九号、一九八〇年。
- (4) 『中国文学報』第十九冊、一九六三年。後に『乱世を生きる詩人たち——六朝詩人論』(二〇〇一年、研文出版)に所収。
- (5) 汲古書院、二〇〇二年。『西晋文学論』については、青山剛一郎氏(『中国文学報』第六十四冊、二〇〇二年)と柳川順子氏(『集刊東洋学』九十三号、二〇〇五年)による書評がある。
- (6) 創文社、一九九六年。「Ⅲ かくありありたい我れ——『五流先生伝』型自伝」九三頁。
- (7) 渡邊欣雄・三浦國雄編『風水論集』(一九九四年、凱風社)所収。
- (8) 『日本中国学会報』第五七集、二〇〇六年。宮崎氏は、『葬書』の成立を推定する上で、作者とされる「郭璞」像の変化の様を相地との関連から考察する。そして、「郭璞の人物像は、六朝期に占筮に精通した神仙のような人物としての形象が形作られていたが、唐代には易占術を使用した相地書の著者とされ、北宋に入つて、土地の形勢を重んじる相地術の著者にと変化し、南宋期には完全に葬書の学の始祖としてのイメージが定着したと言えるだろう」と結ぶ。宮崎氏は、『葬書』の成立と変容を考察するために、作者とされる「郭璞」が相地術の始祖とされた時期をたどった。いわば論の補強材料として、「郭璞」像を見たともいえるが、そこで得られた成果は、今後の「郭璞」研究にとって大いに価値があることはいうまでもない。

- (9) 勁草社、一九六四年。
- (10) 『東方学報』第五十一冊、一九七四年。後に『六朝精神史研究』（一九八四年、同朋舎出版）に所収。
- (11) 『日本大学人文科学研究所研究紀要』十一号、一九六九年。後に『中国語学研究』（一九九五年、汲古書院）に所収。
- (12) 笠間書院、一九九五年。本論にて引用した論文も、この書に収める。
- (13) 笠間書院、二〇〇六年。
- (14) 人文学の方法や問題点については、Edward W. Said, *Humanism and Democratic Criticism*, New York: Columbia University Press, 2004 [E. W. サイド『人文学と批評の使命 デモクラシーのために』村山敏勝・三宅敦子訳、岩波書店、二〇〇六年]などを参照。E. W. サイドは学問の専門化によるタコツボ的状况を批判し、人文学を限られた領域の活動とせず、他の次元の知的営みとどのように、またどのようなかたちで関係できるのかを論じる。また、今日の変化する環境の中での方法として、文献学への回帰を主張する。
- (15) 『中京大学教養論叢』三十五巻一号（通巻百六号）、一九九四年。なお、「郭璞『山海経』注の態度（上）」（『中京大学教養論叢』三十四巻四号（通巻百五号）、一九九三年）は、郭璞の本文校訂と旧注の引用を考察し、「公開明示するフェアな態度」であり「客観的な学術態度」としている。
- (16) 長沢氏の「爾雅各本文字比較対照表」は、『神宮文庫蔵 南北朝刊本爾雅』（一九七三年、古典研究会影印）の巻末に収められる。
- (17) 『近世儒学研究の方法と課題』（汲古書院、二〇〇六年）、十三ページ。
- (18) 作品研究の方法論については、高橋修氏が「文学研究における、近代的な人格主義・科学的実証主義の行きづまりが強く意識される今日、硬直化した読みに多義性を回復しようとする試み」（『読むための理論』（世織書房、一九九一年）「文化人類学」

の項。三〇七ページ。)がなされていることを指摘する。このことは中国古典学も同様であり、『日本中国学会五十年史』(汲古書院、一九九八年)の思想部門の回顧と展望で、三浦國雄氏が過去の思想研究が方法論に無自覚であり、これからは様々な方法を取り入れることが必要であることを述べている。